

庄司会長・岡安さん対談 (2012年8月)

(岡安による第一次修正済)

庄司：どっちにしても、気軽にお話を伺いたいということなので...
何も話してないですか？

大本：一応、先生が大学生協をあらためて見ようということの中で、その歴史を今何人かの方とお話しているということと、ちょうど栗木さんが定年を迎えて、その後2年程委託職員をしておりましたが、それも終了したので、栗木さん、国際関係だけ、今ちょっと栗木さんからヒアリングを始めたところなのですが。その流れの中で、その前段階にあります、岡安さんが専務だったころや副会長だったころのことを含めてお話をお伺いできればということで。
それ以上のことは、私も分かっていないのですが。

庄司：大体そういうことなのですが、大学生協の連合会ができてから50年を過ぎた。1958年にできていますよね。

岡安：ああ、50年過ぎた本が...

大本：あの、創立期のイメージだけの...

庄司：一応、本を出したのですが、大学生協そのものと言うと、戦争直後とか、戦前にもいくつかあるところはあったわけですね。そういうのも入れて、歴史をまとめなくてはというように思っていて、50年ではできなかったから、じゃあ60年というのをぼんやり考えていると、またできない...。だから、今から考えておきたいということがありまして、とりあえずですね、栗木さんに...
まずは栗木君が定年で辞めることになったので、彼が主に担当してきた国際関係のこと、国際交流ですよ、それについて彼が記憶しているところを聞き出しておこうと。それと同時に関連の資料を、後の人が使えるようになるべく整理したいということがあって、それをこの4月から始めて、実質的にまだ2回しかやってないのですよ。今ちょっと大本君とも話していたのですが、あと4回くらい必要なので、9、10、11、12月とやらせて欲しいと私は言っているのですが、なぜ合計6回かと言うと、最初の時に栗木君がどんなふうに関わって、国際交流をやるようになったかということをおお体聞いたのですよ。

それで、70年代、80年代の話があって、特に2回目に80年代に国際交流が本格的に始まった頃の話をしていろいろ聞いたのですよ。それを踏まえて、この後、90年代前半後半、2000年代前半後半くらいにして、現代につながるように彼が主にやってきたことを聞き出しておきたいということがありまして、やったのですが、前半2回の特に関係が本格化しはじめた頃に、岡安さんが専務だったわけですね。

岡安：東大生協の専務から大学生協連の専務になった...

庄司：ちょっとその辺をもうちょっと詳しく教えてください。東大生協の専務だったのは...？

岡安：1980年か81年か...

大本：うちに来たのは85年ですね、89年か？というふうにさっき原田さんから聞いたのですが。

岡安：6年間やっているんですよ。遡るとどうなるのか？

庄司：こちらに来たのは85年だと？

そうすると、79年くらいからおやりになっているかもしれないですね。

岡安：30歳の時からですね。よくやっていたね、30歳から。今から考えると。

大本：そうですね。

庄司：そうすると、85年にこちらに来て、こちらはいつまで？

岡安：2000年。

庄司：ちょうど、2000年？

岡安：1999年の12月ですよ。

庄司：99年の12月の総会で変わったということですよ。

岡安：ちょうど2000年には降りているのです。

庄司：ここに来たのは1985年前後、99年までやっていたのですか。そうすると、15年くらいやっていたのですね、大学生協連の専務を。

岡安：飽きずに（笑）。

庄司：そうすると、85年にこちらにおいでになった時は、まだ福武会長ですよ。

岡安：福武会長が89年に亡くなられたときは専務ですから。

庄司：それで、福武さんの葬儀その他をどうしようかという時に、じゃあ大学生協がやりましようと言ってきて、実質的にそういうふうにやってくれましたよね、その時の専務は岡安さんですよ。その福武さんから次の会長に引き継いで、ずっとそれもやっていたわけですよ。大内先生は何年までやりましたかね？

岡安：私と同じ年に辞めました。99年の12月の総会で降りて...

庄司：その後、田中学さんが会長になって、小林さんが専務になった、ということですね。ちょっと伺っておきたいのですが、岡安さんは最初から大学生協ですか。

岡安：卒業したら大学生協です。学生時代は生協はやっていないのです。

庄司：就職先として大学生協を選んだのですね。最初の大学生協はどこですか。

岡安：東大です。

庄司：東大は何年ですか。

岡安：1973年の4月です。卒業したのが73年の3月ですから。

庄司：大学はどこを卒業されたのですか。

岡安：東大です。東大の工学部です。

庄司：工学部というと、どんな分野ですか。

岡安：応用化学です。

庄司：応用化学というと、具体的には...？

岡安：プラント関係です。いわゆる、あの頃はやりので言えばプラントです。

庄司：いわゆる石油を持ってきて、A地点とか造るような...

岡安：どちらかというとなんかそういうのが中心ですが、私の学科はもっと特異な、爆発現象論とか、そういう三菱の大手町の会社が爆破された時に顔を出して、あれはああだ、こうだと言うのが学科の教授だったのです。そういう学科ですよ。

庄司：ちょうど、コンビナートの爆発事故だとか...

岡安：いろんなことがちょこちょこ起きたりして、爆発現象論ですからそういうことができるのは...ですから、卒業して資格をきちんと取ると、危険物取り扱い主任者が取れるんですよ。私は取らなかったけれど。

庄司：私、そのころ労働現場の調査をやっていたのでね、それでプラントですね、その労働者がどんなことをやっているか、要するにプロセスインダストリーですから、基本的には制御室で計器を見ている労働ですよ。だから、そういうのが下手をするとああいう爆発事故に繋がるとかいうようなことをいろいろ調べていました。そういう時期ですね。

岡安：まったくそういう時期です。

庄司：その頃、そういうことを勉強したにもかかわらず、就職先として大学生協を選んだのは、何か理由があったのですか。

岡安：理由は簡単です。留年を3年もすると、普通に企業に行ってもろくなことがないからそれは止めた（笑）。普通じゃない企業というのは、生協がちょうど目の前にあったわけですよ。これは普

通じゃないですからね、運動をやっている組織ですから、これはちょうどいいんじゃないかと、非常に割り切ってしまうと、そういうことですよね。

庄司：3年留年して、大学院の修士課程は行ってないですか（笑）

岡安：行っていません。だって、大学にいないのですから。

庄司：大学に行っていないといっても、生協の活動をしていたわけじゃない？

岡安：生協ではないです。学生運動そのものをやっていたのです。

庄司：学生運動そのものですか。そっちの方の出身？ どちらかというと。

岡安：ええ、ですから、いろんな生協に来て、運動論とか社会科学のことについては何ら抵抗がないのですよ、実は。だから趣味的には自然科学関係は当然趣味にして、いまでもそういう関係の本を読むことは好きですけどもね。

庄司：そうすると、東大生協に就職して、そこでずっとやっておられて、79年か80年くらいにはそこで専務になった？ 間にどこか、別の生協を経験したりしていることはないですか。

岡安：してないです、全然。

庄司：そうすると、東大の専務をそこから6年やった。70年代後半の東大生協ですね。

岡安：そうですね。まず、専務になる前が。

庄司：そうですね、70年代後半に一般の生協の職員で店長なんかをやったりして...

岡安：やっています。現場をやっています。

庄司：そうすると、79年か80年くらいに専務になった...？

岡安：東大卒で当時全部現場から叩き上げてやったのは、私が最初なのではないですかね、東大の卒業生大勢いましたけど、横から入ってきてすっとなるのはいましたが...

庄司：東大生協の時代については何か強い記憶、こういうことはよく覚えているようなことはありますか。

岡安：結構ありますよ。順不同で言いますと、九州の除名問題が起きたのです。私は、除名問題は批判的だったですね、そもそもが。もともと寮とか、学生の自治会の学生運動は、全学連は分裂したりしたのですが、寮は生活の場ですから分裂しないのです。生協はいったいどちらなのか。生活の場の組織なのか、学生運動の組織なのか。で、学生運動の組織だったんですね、当時は。私は生活の場の組織ならば、組織の分裂などやらない方がいいんじゃないのと、除名とかは。というのが、内々は当然あって。論争は好きだけれども、論争することと組織分裂とは別なのですよ、本来

的には。異種の間があるから論争が楽しいのであって、同質の間だけいたら論争なんてできないです。寮は、異質だけれども仁義というか、昼間はキャンパスでわあわあ騒ぐけれども、夜になったら絶対やらない。お互い、寝る場所なのだから。そういう生活をして、私も学生時代に豊島寮の寮委員長などをやった時でも、学生運動は、もう東大紛争は終わっているから活動家はみんな嫌がっていて、何もしない。仕方がないから、閑そうな人間を選ぶわけです。閑そうな人間は全共闘系の人間です。当時の東大だったらそういう感じでしたからね。革マル、社青同、いろんな人間がいました。あと、一緒にやらないかと言ったら、みんな目を丸くしていました。「いいんですかねえ」って。私は留年しているから年上なのです。いいんだ、いいんだ、そんなことは。ドクターコースの間もマスターの間も一緒に寮委員会構成して。一番あの頃は、真面目なわけですよ。きちんと実務はやるし、そういうことは多分その後のいろんな意味の原点ですよ。

庄司：その、九州の分裂の問題というのは、専務の時？

岡安：専務になる前。本郷の店長をやっている時だと思います。

庄司：書籍部の。

岡安：ハイ。その時に除名反対はおかしいという学外の集団が本郷のキャンパスに現れた。当時、同級生で大学生協連の学生委員長をして当時常務理事がいたんですけど、彼もあんまり除名には賛成していませんでしたね。

庄司：それが一つね。

岡安：それが私が学生時代の原点というのは寮で、寮の活動ですから、意見が違うから除名するとか分かれるなんてこともちょっと違う、多分。それは、私が大学生協連専務をやっている時に、様々な話し合いをするために九州の間を呼ぶことがあった。その時に、伝統的な左翼運動をやっていた人たちが、私のやっていることに違和感を感じていたはずですよ。誰とは言いませんが直接言われましたからね。「なんでわざわざ戻すんだ」と。違うんだと。「こういうのは、福武先生も言っているだろう、生協なんだから。一緒にやる時はやるのが本質だから。協同って言うのはそういうことじゃないの」っていうことで、それはあまり表には出ませんけれどね。

だから、除名があったおかげで大学生協運動がすっきり前進したという総括をする人と、私は除名があるうがなかるうが歴史は進んだらうという方ですからね。だったらなくてよかったんだっていう。

大本：76年ですね、除名が。

岡安：ということは私が本郷の書籍の店長をやっている時ですね。あの頃は結構専従組織の中では店長のくせにでかい面をしていました。労組の委員長をしていましたから。

庄司：その除名問題以外には、東大生協時代に特に記憶に残っていることはありますか。

岡安：記憶に残ったのは、いろいろなことを経営論とか勉強すると、それがすぐ実践できるという

のは、ある意味、非常に楽しかったですね。はっきり言って滅茶苦茶楽しかったです。周りも若いし。

後は、こちら連合会に来たときもそうですが、東大生協の時も専従役員を1人にしてしまう。2回やったことになる。東大生協の専務の時も、常務理事などがいたのも全部1回なくして。店長とか、そのクラスの人たちの集団の議論の中でやればいいやと、やったことがあります。

庄司：このあたり、私は法政に就職して、法政大学社会学部において、ちょっとアメリカに2年くらい行ってきましたから、その後東大に戻ったのは78年なのですね。で、戻ってきてまた生協を使わせてもらうからということで組合員になったのですが、当時の東大生協がどんなふう動いていたのかということは、全然。つまり、時々生協に行ってものを買うという以外はないのですよ。だから、この当時、私がいた頃は岡安さんは常務だったわけですね。で、やがて専務になるわけですね。この辺り、どうですかね？ 主要エポックなどは一応書いてあるか。一言カードは...

岡安：一言カードの定着ですね。

庄司：これは、誰が始めたかというのははっきり分かっているのですか。

岡安：それはかなり前なのですよね。70年前後から苦情カードというのが始まって。そこら辺を物語風に高橋はるおさんが言ってました。「苦情カードでは、褒めたい時に使えないからダメじゃないか」と。じゃあ、これは一言カードかと。

品揃えカードというのは、書籍部などにあったのですね。

「一言カードの定着」という意味は、いくつかの原則があるのですね。「すべてに答える、すぐ答える、公表する」という原則を打ち立てました。そのころの一言カードというのはまだ、いい意見が来れば公表するけれど、悪い意見は公表しないという風潮だったのですね。それじゃあ、いけないだろうと。

要するに、執行部にとって悪い意見が来た時に、その意見も公表しちゃえということです。

例えば、傑作だったのは、「『生協ニュース』は赤旗と同じだ」という一言カードが来た時です。当然反論を書く。それをどうしようかと言ってきたので、「生協ニュースに載せろ、載せろ」と。で、『生協ニュース』に載せたのですよ。そしたら、「えっ、生協はこんなことまでやるのですか」というわけで、生協に対する見方が変わっていくわけですよ。

そういう時期の前に、福武先生が面白いことを書いてくれたわけですよ。『会長所感』を。あれは助かりましたよね、本当に。あれは79年くらいで、私が常務理事をやって駒場で購買部の店長をしている頃、終わりの頃なのです。それを見て、「ああこれだな」ということで、それを一生懸命コピーして、みんなに配っていました。「やっぱりこれだろ」って。

庄司：それで、常務から専務になられて、専務の期間結構長いですね。6年ですね。

岡安：長いですね、私はノンビリ屋なので、あんまりせかせかと成果を出そうとか、何か...。3年で成果を出したとか。そういうルールには全然関心なくて。何をやらなければいけないとかはあったのですが、何をやるのかというのは、この頃は前にいっぱいあったのですよ、やることは。本郷の書籍を今の書籍部に変えなければいけないというので、これは初めて施設部長...事務局長に会い

に行って、当時の学生部長の方が「事務局長に会いに行けよ」と言うので、「あ、いいんですか」と会いに行って、「日本一大きい書籍部を造りたいのだ」と。「そんなの運営はできるか」と。「ここはいっぱい売れるから、いくらでも運営できる」と言ったら「そうか」と言われ、今の場所の柱を抜いたり壁を抜いたりして努力して頂いた。「耐震はもつから大丈夫だと思うのだけれどもどうか」というので「移る」というのが、「規模の拡大」の内容です。

あとは、「販売系・営業時間の変更」というのは、書けば簡単でその後も変更しているんですね、いろいろなところで。この変更は、私が労働組合の委員長をやったという関係がありますが、労働組合との関係を徹底して重視して、労働組合との話し合いを納得するまで。結局労働組合が決議しましたが、最初揉めるんです。納得するまでずーっとやったと。ただし、その時に子どもを抱えている人がいっぱいいるというので、子どもの関係で変則就業時間を取るということをするとか、4週5休制をついでに導入するとかをやって、サービスは増えていくけれど、休みも増やすという事で可能なのではないかと。まだこの頃は売れる時期ですから。今みたいに売れなくなった時期に営業時間を増やすというのは、ものすごくロスがあるのですよね。売れる時期ですから増やすことができたのです。売れなくなった時期に営業時間を増やすということはほとんどロスですからね、。

あとは、「店舗」とは何かということで、これはかなり専従向けに書いていますけれどね。大学生協の店舗というのは四つ位の役割があるんじゃないか。これは今、どうなっているのか分からないけれど、これはかなり、東大生協の頃にこういう考え方とか全部、現場からやってきたのを整理して、東大の中でやってきて、後は大学生協連の理事会とか何かで提起をして、総会いるんなところのセミナーとかで紹介して提起してやっていった。

総代交流会もやった。あの頃は、総代会を春と秋にやっていたのです。そのために半期決算を出すために、みんな準備に追われる。「もう、秋の臨時総代会はなんかいらない。定款にも書いてない」。しかし単に止めるのではなく、何をしようかというので、総代を集めて交流会でもしようかということで最初にやったのが食堂の問題。みんなが日常的に利用しているのだから、食堂をやるうじゃないかと。そうしたら、それまで不満を言っていた、当時の教職員理事の人が、常任理事会で「本当にやるのか、我々がこんなに不満があるのに。こんなの收拾つくのか」と。で、覚悟してやったんですね。

で、やったら、これが傑作です。不満が出るんじゃないんですよ。「こうしたらいいんじゃないか」、という意見ばかり出るんですよ。私は、その時にびっくりしました。「やっぱりこれは生協だな」と。「やっぱりそうなんだ」と。

組合員の声を聞いてその力で業務を変えることが現実的に可能じゃないのということ、それは素直にそういうことをすればいい。

次は購買関係をやって、購買をやると本郷と駒場では全然違って、本郷の方は「秋葉原と値段を比べて、高いところがいっぱいあるじゃないか」と。じゃあ、「『秋葉原価格調査隊』というのを作ろうか」となって行って、専従と教職員とがペアになって値段を調べていくと。

『秋葉原価格調査隊』は当時のNさんという商品担当の人が総代交流会で提起したものです。当初、「俺はそういうことをするのは嫌だ、それは俺の仕事じゃない」と言っていた。でもまあ、「業務命令だから出るべし」と事業連合の商品部長に言ってもらった。来てみたら、一番ノットのは彼だった（笑）。そういうものだったんですよ、生協は。要するに、そういう場面になるとそう

いうふうになると。

また、学生委員会合宿などの場面ですが、「学生委員会の合宿に店長出てくれ」と行かせるわけです。食堂の店長などにも「行けよ」と。「だけど、東大の学生、あんな頭がいい連中と一緒に合宿なんて嫌ですよ。専務、行くんですか？」私、「行けると思うよ」と言うと、「専務が行くんならいいや」と言ったが、私が行かない時があったわけです。店長からすれば「騙された」って…。

で、「どうだった」と聞くと、「いや、全然予想と違いますね。親切にしてくれました」。要するに、一緒に事業を作っていくことの共感のできる組織なのだと、店長が実感する。学生も普段働いている人間と話ができるのが楽しい。

表向きは形式的にはお店があって、いろんな批判もある、商売ばかりやっているのではないとか、いろんなことがあるけれども、現実にはそういう気持ちの繋がることのできる事業体なのだと。それはなぜかと言うと、生協の意味を実践すればそうなるのですよ。頭の中の理屈だけじゃなくて。ということがこの時期ですよ、私の。

庄司：あと、立命事件に店長派遣というのは、これは簡単に言うと、どういうことですか。

岡安：これは、簡単に言うと、ある年のゴールデンウィーク真っ盛りの休みの時に、印鑑屋から立命の専務理事に電話が来て、「お宅の専務理事が銀行印を作ってくれというふうに来ただけだけど、どうしましょうか」と。専務なら専務理事に「なぜ作る？」聞くのが普通だと思ったのですが、「そうか、そう言っているのなら作ってあげてよ」と。

というところからあったのだけれど、実はその前にほぼ2億円くらいを横領していたのですね。いわゆる「2億円横領事件」というふうに普通に言われている…

原田：実際は4億なのですけれど。

岡安：それがあって、これはまだ東大生協の時です。それで向こう、京都へ行って、あちこち行って。帰ってきて、連合会の事務所で私が主張したのは覚えています、「専務理事の解任」と。「印鑑のことがあり、最高責任者が被害者だと言ったら、この組織は絶対直らないぞ。まず、解任しなきゃ組織が持たない」と、いうことを言った覚えがあります。

庄司：東大生協の専務として。全国理事でもありますね。全国理事でもあったので、理事会で言ったということですね。

岡安：理事会ではないですね。当時の専務から電話がきて、「向こうに行くんだけど、来てくれるかな」「いいよ」というところから始まりましたから。

庄司：それで、一緒に行った？

岡安：はい。その時に向こうの理事長の先生とお会いして、理事長の先生がしっかりした方だったので、これは大丈夫だという感じは当然しましたよね。要するに業務の中で相互チェック、チェック機能がほとんどなされていないと。銀行の印鑑なんていうのを単独で使って3億円も金を出せるような、そんな組織だったら誰も信用しなくなるよということで。

その時の書籍の店長派遣というのは、本郷の書籍部にいた店長が立命出身だったんですね。で、向こうは大変そうでも、「彼は大丈夫かな」という気はあったのですが、一応本郷の書籍部の店長だし、全国的には一番いい店舗の店長ということだから大丈夫だろうとなって送ったのです。

庄司：それで、東大生協自体のことをお聞きするともう、時間がいくらあっても足りないくらいですけれども、東大生協から大学生協連の方の常務に最初なった。1年ですかね？

岡安：半年です。

庄司：で、すぐ専務になられたわけですね。その辺の経過は？

岡安：経過というか、6年もやりますと、5年過ぎた辺りから東大生協の専務はいったいどこに行くんだろうかと。それなりにちゃらほらと噂になるわけです。当時の大学生協連の中でも話題になっていましたし、大学生協連の中ではいろいろあって、常務理事が5、6名いますと、「次の専務は誰がやるのだろう」と。「やりたい」と言う人もいたんだけど、ほかの人間は「いや、そうじゃないんじゃないか」と言うので、まあ、揉めないようにするためには、外部から東大生協の専務である岡安がやるのが一番無難なのかもしれない。ということもあり、重鎮の常務理事の人が来て、「やってくれないか」というふうに来たのが出発です。

庄司：岡安さんの前の専務は？

岡安：高橋はるおさんです。

庄司：ああ、高橋はるおさん。10年、長かったんですね。これは、最初常務として来たのだけれども、半年間常務をやってもらって、専務に引き継いでもらうという、そういう前提で来ているんですね。

岡安：そうです。

庄司：それから15年やったんですね。

岡安：そんなにやりましたか？ 副会長含めてですね。そうだよ、周りのスタッフもきっと、いつ辞めるのかと言えないし、苦労しながらみんな仕事をしたと思いますけどね。

庄司：それで、福武会長から大内会長に替わって、大内会長が辞める時までやっているということですね。この間が15年ありますので、いろいろ話を聞き出すと、時間がいくらあっても足りないと思うのですが...

..... 国際活動に話題は移る.....

岡安：大学生協のアジアでの国際活動は、1983年頃にICA-AP地域の事務局長が、東大生協に来た時に始まると言えます。その地域事務局長が書いた文章があるのですが、どこにありますかね。

庄司：これは83年？

岡安：83年くらいだったと思うのですが。プリ（PUR I）さんという人がいたのです。

庄司：プリさん。何人ですか？

岡安：インド人です。発音によって“プリ、”なのか、“プーリー、”なのか、分かりませんが、その人が東大生協に来て、かなり印象が強かったらしくて、「これはアジア太平洋地域にない仕組みだし、そういうことについて考えなくちゃいけないんじゃないか」というので、報告書を書くとともに、85年あたりにアジア太平洋地域の生協セミナーをやった時に、大学部会というのが開かれるのです。たしか、85年の私が連合会常務理事、の前後のところにあるのです。その前提が、そのプリさんという人が来ての話です。

庄司：プリさんが来て、84年にアジア3カ国調査というのをやっている。

岡安：それは、高橋はるおさん、小林さんがやっていますね。

庄司：プリさんがやってきたから、じゃあ、こちらからもアジアの生協を一応見てみようじゃないかというので？

岡安：それは私は分かりません。やっていたようなことは分かるのですが。

庄司：それで、85年にICA東南アジアセミナーというのがあって、そこで大学生協についての？

岡安：あったですね、15人くらい集まっていたね。その時には確かに、それは横山君がやっているのです。確か、いたはずなのです、当時。で、あとは千葉に行った中久保君がやっているのですね。

庄司：それで、ICA-AP生協委員会の委員になるんですよね。専務になってすぐですかね？ 専務が、高橋さんが既にやっていたから、それを引き継いだという感じですか。

岡安：いや、新しくです。比較的、私になってから新しくやったことは結構多いんです。連合会の専務理事になってからの86年頃に、日生協からICAのアジア生協委員会の委員の委嘱を打診され、委員になりました。それでシンガポールで生協委員会に出席しました。その時は確か横山君と一緒にいるのですけれどね。帰りにフィリピンに寄って帰ってきたような記憶があるのだけれども。それは横山君に聞いた方が早いかもしれない。その時は、まだ日生協の理事になっていないのです。日生協の理事は、高橋さんがもう少しやらせてくれというので。普通、大学生協連の専務理事になった時には、そのまますぐ日生協の理事になるのですけれど。

庄司：ちょっとそれがずれたわけですね。

岡安：2年くらいずれた。

庄司：生協総研の理事も大体ずっと…。今は少しシステムが変わっていますけれども。

岡安：総研の常務理事もやっていますけれどね、私も。

庄司：今のプリさんが来て、日本の大学生協を見て、「これは面白い」と言ってくれたわけですよ
ね。

岡安：文章が、このくらいのパンフレットがあったけれど、もうないだろうね、今、どこにも。あ
るとしたら…ここか…

庄司：そういう資料がひよっとしたらあるかもしれないですね。今、ちょっと整理してもらってい
るのですけれどね。

(Puriさんのレポート(英文)はありました。)

岡安：栗ちゃんのずっと前ですからね、国際担当はその前に2人いますから。栗ちゃんの前が、大
須賀のお姉様。

原田：ああ、そういえばやっていたね。

庄司：おおすかっていうと、今、アメリカにいる？彼女のお姉さん？

岡安：いや、彼女のことです(笑)。

原田：ああそう、大須賀さんがやっていたの？

岡安：やっていた。その前が横山君。

庄司：それで、要するに、ほかの国にはあまりない？大学にこういった生協があるのというのは。
そういう感じのことは、当時から言われていた？

岡安：言われていたし、私自身もそれは知っていました。確かに、こういうのはどこへ行っても聞
かないし。で、そのプリさんが、「大学に協同組合はあるんだけど、日本とは全然違う」と。
学生だけしか入っていないとか、インドみたいに教職員だけがやっているとか。そういうので、大
学の構成員全体が入り込んでやっているという、全構成員の中で作られている生協というのは、ま
あ珍しかったのでしょうか。多分、新鮮だったと思うのです。

それで、ICA-APの生協委員会に何回か行って、…多分1988年頃(?)に、チェンマイです
ね、開催されたのは。その時は確か、他に山下君が同行しています。バンコクへの帰りは列車だっ
たことは覚えています。14時間くらい。

そのチェンマイの時に、「タイにも大学生協がある、比較的日本に近いのがあって、実はいろいろ
な苦勞をしているので、タイでセミナーをやらないか」と。別にアジア太平洋地域全部でやろうか
とか、そんな大げさなことではなくて、「タイがやりたいというので、日本のいろんな経験を紹介
してくれないかね」というので、「ああ、それもいいでしょう」とやったのが、タイ。それが最初

なのです。

庄司：87年ですか、マニラでICA-A Pの生協委員会の大学生協がそのサブコミッティになっていたから、それで委員会みたいなものがあった？ 生協委員会そのものがあった？

岡安：生協委員会そのものです。サブ委員会発足は95年ですから。

庄司：生協委員会の中に潜り込んでいたわけですよね、いわば大学生協が。で、それに岡安さんと栗木くんが一緒に行ったのですか？

岡安：よく行っていました。

庄司：この辺のことは栗木君からも聞いているのですが、88年にもう1回あったわけですか？ 87年にマニラであって、88年に...

岡安：毎年やっていますからね。

庄司：88年はどこであったか、覚えていますか？

岡安：さすがに覚えていないですね。あと、行かないときもありますしね、私が。田辺さんが行った時なんかは、私は行かなかった。

庄司：それで、大学生協を紹介するオリエンテーションセミナーを始めた？ 書いてあるのがそうですね？

岡安：これがそうです。これはチェンマイで、最初に企画が提起された。

庄司：88年の小委員会でそれが企画が提起されて、最初がタイのチェンマイだったわけですか。

岡安：コープイン京都のオープンの後なのです。だから、関西から飛んだんですよ。

原田：89年の前ですよね。89年1月オープンですからその前ですね。準備...ただ、その時、...

岡安：オープンして、その後に出かけていった。

原田：ああ、そうかもしれないですね。オープンして、打ち上げ、レセプションかなんかやった後かも。

庄司：1月、真冬ですね。

岡安：こちらは真冬ですね。向こうは全然関係ないですけど。

庄司：それで、バンコクにいて、バンコクから列車で行ったのですか。

岡安：いいえ、チェンマイは、その前にチェンマイで生協委員会があった時にそういう企画が提起

されて、バンコクに戻ってきてバンコクの協同組合連合会 C L T (Cooperative League of Thailand) の事務所でいろんな人と打ち合わせをしたと。オリエンテーションセミナーをやるために。

庄司：やるために、その前の年に行っている？ 88年に行っているということですか？
タイのチェンマイで88年に生協委員会をやっているわけですよね。その時の企画提起で、89年の1月にコープイン京都をオープンして、その後すぐ行っているわけです。

岡安：多分その前。結構その時は、あまり準備しないですぐ行っちゃったんですよ。で、みんなタイ語も何もまったく知らないわけです。

庄司：当時、チェンマイに生協があった？

岡安：チェンマイに生協がありますけれど、生協委員会の会議というのはあちこちでやったのですよ。フィジーでもやったのです、もちろん生協はありましたけれど。モンゴルでもやっているのです。

庄司：それぞれの国の大学生協というのは、日本の大学生協と違って、教職員の大学生協...

岡安：教職員のであったり、学生のであったり。

庄司：学生であることもあった？

岡安：ありました。インドネシアは学生です。「コープ・マハシスワ」ですから。

庄司：インドネシアは学生の生協ですね。むしろ、そうだったわけですよね、ICA-APの生協委員会というのは、各国から出てくる大学生協の委員でもっていたような時期があったと。

岡安：そうでないと生協委員会はとてもじゃないけれど成立しなかった。日本生協連と言うより実質的に日本の大学生協連がリードしているようなものです、何の違和感もなしに。変な感じなのです。今から思うと。

庄司：その辺のことを栗木君に聞いている間に、この辺のことは岡安さんが中心になってやっているか、そういう感じだと思ったので、それで岡安さんに話をダイレクトに聞いた方がいいと思ったんですね。だから、その辺のことを教えていただけるといいのですが、88年にチェンマイで打ち合わせをやって、89年にやった時は？ やっぱりチェンマイでやっている？

岡安：オリエンテーション・セミナーは、バンコクでやっています。
その時の参加者は、大学生協の一定の人数、関心を持っている教員、いろんな大学の。あと一つ重要なのは、政府の役人でした。この人たちが入っていると、あとが違いますからね。要するに協同組合省の、日本で言えば副大臣みたいな人が来ていたり。
そういう形でセミナーを開いたら、次のICA-AP生協委員会で、今度はフィリピンが立候補、手を挙げる。マレーシアでもやってほしい、インドでもやってほしい...

庄司：フィリピンでやっている時に、クリマコさんて人が来ました？ どんな人ですか？

岡安：クリマコさんというのは、小さい高校、全国から優秀な人間を集める日本でも始まりましたよね、横浜あたりで。ああいう科学技術高校という、小さい高校なのですが、そこに生協があって、その専務理事です。理事長は教員で別にいましたから。マネージャーですね、それがクリマコさん。

実は、そこら辺の、当時の人の国際活動の写真をみんな持ってきてある。USBで。あとでUSBを渡すから、適当に年代別に引き取って。私、昔から写真を撮ることが好きで。

大本：はい、分かりました。

庄司：フィリピンでやって、同じ年にインドでもやっていますか？

岡安：やっている可能性ありますね、あの頃は。

庄司：インドだとすると、どこだったら可能性がありますか。

岡安：プネです。プネというのは、ムンバイから列車で結構入っていったところで、内陸です。高原の一番北側のところだと思います。“プネ”と言ってみたり、“プーナ”って言ってみたり。そこで日本語とフランス語のできる女の子が英語に通訳して。

その時に、一生懸命積極的にいろんな話をしていたのがドングレさんという人で。まだ、髪がふさふさの時期で。ドングレさんが一生懸命、あの人面白いなあって。一番熱心だったのですよ。

庄司：ドングレさんとの関わりはこの時以来？ それで、翌年インドネシアで？

岡安：翌年、インドネシアでやった時は...インドネシアでは1回しかやっていないんだっけ、2回かな？

庄司：インドネシアは、どこでやっているのですか？

岡安：マラーンというところのはずです。キンタマーニからマラーンへの旅程でしたから（笑）。ジャワの西南。そこでやりました。

庄司：で、翌年マレーシアで？

岡安：クアラルンプールです。これは、当時の学生常勤理事を何人か連れていきました。

庄司：オリエンテーションセミナーの継続ですよ？ ということは、要するに、日本の大学生協を各国に紹介する、こういう生協をやっているのだということ。

岡安：そうですね。マレーシアは、生協という組織は数はもともといっぱいありました。で、なぜか大学生協組織をガクブという名前です。これも変わっている（笑）。

庄司：ガクブって言いますね。当時はどうだったですか。最近行った感じでは、高校に生協があるのですね、マレーシアは。大学の生協はパラパラとしかないですよ。パラパラっていうのは、いくつかの大学にあまり大きくない、小さな生協があるだけっていうのですね。

岡安：マラヤ大学は、どうなっています？

庄司：マラヤ大学は、生協ありますね。

岡安：あそこは、どちらかというと、ブックストアが中心ですね。それに、たまに思いついたように雑貨を売っているような感じで。

庄司：それで、当時は大学にも生協があったという感じですか。

岡安：当時のこの頃ずっと1回終わらせた後、体を書いた総括文書があります。

庄司：94年にフォローアップセミナーをやっている。

岡安：それはフォローアップセミナーなのですが、その次...

庄司：その前？

岡安：今言ったのは、東南アジアを中心にした大学生協の現状、学生との関係とか学生中心だとか、マネージメントとか、学生運動の関係だとかで、学生は理事に参加させないというマレーシアの話とか、結構細かい話がいっぱい書いてある。メモで文章にして、国際部に置いていったのだけだね。

庄司：フォローアップセミナーというのを、これは、8カ国でやった？ どこでやったのですか、フォローアップセミナーというのは、東京？

岡安：違います。これは、もしかしたらチェンマイかもしれない。

庄司：チェンマイって、そんなにやっているのですか。

岡安：チェンマイでのセミナーはこの1回です。チェンマイは以前に生協委員会が開催されただけで。そこは、オリエンテーションセミナーを最初に提起した地、場所だから、フォローアップセミナーはチェンマイがいいかねって、まあシャレみたいな感じで。その時は、日本生協連の田中ひさしさん、大学生協連の元の専務です、彼にも行ってもらった。

大本：私も一緒に行きました。

岡安：チェンマイは、寒い時にお湯が出なくて苦労してました。

大本：山の中にある蜘蛛の巣？みたいなところで。

岡安：あとは日生協の佐藤さん。

大本：そうですね、その時の国際担当をされていたからね。

庄司：それで、そのフォローアップセミナーが基礎になって、サブコミッティが独立した。

岡安：そういうふうになっていくのですね。大きな流れはそういう流れです。で、サブコミッティは、確かシンガポールですよ、やったのは。

原田：95年。

岡安：そうですね。

大本：場所ですか。

庄司：サブコミッティが発足したのは94年ですね。シンガポールでやっているのですか、その時に。94年。95年ですか？

大本：94年かもしれない。神戸の震災の前か、後か。

庄司：震災の前だとすると94年の可能性が高いですね。神戸の震災は95年1月だから。

大本：2004年がサブコミッティ発足10年目になるって言ったので、94年だと....。

庄司：ああ、じゃ、94年ですね。シンガポールでやったわけですね。その辺をずっと大学生協の国際交流の基礎みたいなものを作っているのですね、岡安さんはね。

岡安：ほとんどそうだと思います。自負するってことじゃないけれど、歴史を追っていけばそうなると思います。

庄司：その時に接触した各国のメンバーですね、どんな人を覚えていますか。先程のクリマコさんみたいな感じの人ですね。

岡安：クリマコ覚えている。ベス・アキノとか。同じフィリピン。この2人が大体中心になって、あの頃はやっていましたね。まあ、男も何人かいた。あとは、学生がいたのですよ、フィリピン大学の女子学生。これは、私が経営学の方が英語はうまいはずだから、私が読むより速く読めるはずだ」って。まあ、フィリピン大学って、親が、後で名前を思い出さずと思うけれど、親が弁護士と校長先生かな？ とにかく普通だったら協同組合に勤めることなんてありえない。案の定、親から大反対されて、できなくなっちゃった。

庄司：インドはドングレさんのほかには何か、当時....。

岡安：インドはドングレさんのほかに、いることはいますけれど。シャルマという、大学生協ではなくて協同組合のボスが。「ダルマ、ダルマ」っていう覚え方したから。これはインドの場合で

は、名誉職的に存在して、何かあったら顔を出してくる。あまり、私としては体質が合わない。

原田：嫌いだったですね。

岡安：そう、どっちかというね。そこへいくと、ドングレさんなんて、本当に実務的ですからね、一生懸命やる人だから、この人とは話が合う。向こうがどう思っているかは別にして（笑）。あとは、タイは、名前忘れちゃってきてるなあ...スラシットっていう男がいましたね、CLTに。あとは、スリナカリンウィロットという教育大学があるのです。そこのある分校の教員だったのがスパダっていう若い女性、そして他の分校の理事長がいました。あとは、タイだったらここに1年間来ていたチューボンがいた。

インドネシアはイクバルっていう、結構仲良しだったですね。彼も結構元気で、デコピンという全国協同組合連合会があって、その下にコピンドという青年協同組合連合会があって、その会長だったにもかかわらず、デコピンと会長選に出て、副会長選に出たのかな？ 立候補して選挙やって当選したという、結構面白い人間だった。彼は確か博士号を持っていました。

庄司：すると、イルハムはその後...？

岡安：イルハム？

庄司：イルハムっていうのが出て来るのですがね。

岡安：ああ、コピンドーのね。

大本：まだ、彼は若いのですからね。

庄司：若いですよ？

大本：35だと思う。

岡安：そりゃ、私の知っている者とは全然違う。あのころは、ほとんど私の年か、私よりちょっと下ぐらいで、ほとんど私は兄貴分ですから。流れからして。

庄司：マレーシアはどうでした。

岡安：マレーシアは、学生は出てこないのですね。大学生協の場合は、学生は理事にはさせないと。学生運動が起こるので。ということがずっとあって、利用者組織みたいな関係、日本でいうと学生委員会みたいな作り方ならいいんですけど、理事にはさせないと。で、なかなかなくて、学生の方は覚えていない。教員の方で、マレー大学の物理の教員がいました。

庄司：アレハッサンというのは、その前ですか。

岡安：ああ、アルハッサン。髭のハッサンは、精悍な年で。同じくらいのところで、ちょっとポチャッとした日本人的な感じの人がいた。

庄司：今、その人は出てこないですね。

岡安：今出てこないですね。この間、アルハッサンが出てくるのは、名前が何とか、ちょっと今、さすがにいろんな人の名前を覚えきれないので、忘れちゃうね。

庄司：だから、要するに日本の大学生協は、福武さんが出てくる前後ぐらいからかな？ 教職員と学生を含んだ大学構成員全体の生協になってきて、こういうのはあまりほかの国にはないという...

岡安：これがね、あまりない。そもそもそんなに量が多いわけではないのですから。たとえば、タイだったら、教育大学の場合には教員が理事長で、学生を教育のためにそこに参加させてそこにマネージャーがいるって、一見日本に似た雰囲気のところも確かにあるのです。

でも、タイの場合には、大きなところでは、チュラロンコン大学とタマサート大学、そしてカセサートという農業系があって、あそこも特殊で、協同組合も特殊な分け方をしていますけれどね。その三つと教員養成系のところは、それぞれ少しずつ独特な学生と教員の、とかそういう関係、あとマネージャーとの関係を持っている、それからパターン化した...

庄司：タイの先程のカセサート農業大学ですが、その大学生協の作られ方というのは、日本にかなり似ているという気がしましたね、何年か前に行って聞いた時に。学生が中心になって作ったと、原型はね。だけど、その後、実情は教職員か教員がのっとなったというような形になっちゃって、今は教職員中心の大学生協になっていますね。で、そういうところもあるのだけれども、あとのアジアの多くのところは、インドネシアは学生の生協がありますが、あとはほとんど教職員の生協じゃないですか。

岡安：まあ、そうですね。

庄司：そういう点はどんなふうに見ていましたか。

岡安：それが日本の大学生協のオリエンテーションセミナーをやる意味だったのです。要するに、利用者を組合員にしないということは、コンシューマーの協同組合としてはおかしいのだと。単純な論理ですからね。

庄司：だから、要するに教職員が生協やって学生に利用させて、利益を配当しているみたいな感じの生協が多いわけでしょ、実体としては。

岡安：要するにそれは、「多くの利用者少ないメンバー」と、これは限りなく株式会社に近いということはずっと言い続けたのです。で、そういうことを言うと、フィリピンの場合なんかは、学生が元気になるのですね。で、クリマコはどちらかというと、学生を元気させた方がいいんじゃないかというので、クリマコはこういうセミナーとは別に、学生中心のいろいろなセミナーを開いて、そこで私も行ったり。最高なのは、コープサミットという、4千名ぐらい農協とか全部集まって、コープサミットの全体会場で。大学生協の役割みたいなやつを私からしゃべらせて、しゃべったというか。なるべくそういうふうにするという。

そういうふうにして、意識的に日本の大学生協に近い形で学生を参加させる、ということを一生涯やったのがクリマコだったですね。クリマコとベス・アキノのあの2人がペアでやっていたよ。そういうセミナーも開いたし。

庄司：あと、特にヨーロッパとかアメリカとの交流や比較はどうですか、岡安さんの頃は。

岡安：まあ、アメリカですね。アメリカは普通にいう、カレッジストアの全国協会の中にコープがあって、30くらいあるのですかね、確か。で、それがどういう動きをするかということで、たまたま仲良かったシンプソンとか、一緒に行った時だよ、コネチカットが、彼がウニウニと悩んでいるからね、じゃ、呼ぶかって、日本に呼んじゃったとかね、その場で決めて。

庄司：この頃から既に。ハーバードとかバークレイとかの生協はどうですか。

岡安：バークレイ校は、あそこは生協ではないですよ。あそこは単純な自治会運営ですね。バークレイとUC LAは。で、ハーバードはちょっと、なんだろうな…。

庄司：一応、ハーバードコープというのはありましたよね、今でもありますか。

岡安：今でもあります。見た目は前よりいいお店になった。「中抜き」ですからね。マネジメントも全部委託ですから。

庄司：ずっと前からそうなのですか。

岡安：いや、これは90年の終わりころ、97年か、8年くらいですね。その頃にシンプソンあたりが協同組合の敗北って言っていました。

庄司：バークレイの生協は？

岡安：バークレイの地域生協ですか。

庄司：それと大学生協とは関係ない？

岡安：関係ないです。

庄司：すると、大学のお店は自治会が経営しているの。

岡安：そうです。多分、UC関係の各分校は殆どそうじゃないですかね。一番南の方にある、UCサンディエゴには、コープはあるにはあります。冗談で“ピュアコープ、”って言っているのですが、環境や無農薬の食品を量り売りしている。「非常に純粋だよな、みんな」って。UCサンディエゴの大きいお店は、大学が直営にしちゃったんです。ちょうどそこに知り合いがいたから見に行ったのですが。

庄司：いわゆるナックスに加入しているのは、別に生協ではなくて一般の業者ですか。

岡安：何でもいいのです。会費さえ払えば会員になりますから。会費を払わないと、会員から形式的に抹消されるだけで。

庄司：で、ヨーロッパの方とはどうですか。

岡安：ヨーロッパは、シュトゥテンテンベルグに行ったくらいですかね。あ、あるのは知っていますよ。

庄司：95年に行っていますよね、ドイツには。DSWに行っているのですか。そのくらいですか。

岡安：あとは、オーストラリア。オーストラリアはね、なんで行ったのだろう、公式...あ、旅行の...

原田：海外旅行。国際が対象のIDカードの大会。

岡安：そうそう、IDカードの。学生証の関係で。あそこで総会をやったのはかなり前ですね。1984年ぐらいかな？ そんな前に行った時に、コープがあるはずだと。確かにコープがあるんですね。そのコープは、コープのブックストアのチェーンストアなのです。だから、中に入るとコープって書いてあるんだけど、その本屋さんだけなのです。大体、アメリカもカレッジストアって言っていたけれど、実際かなりの部分はブックストアから始まっていますからね、歴史的には。

庄司：それにちょっといろいろくっついているくらいのね。

岡安：UCLAとか、UCバークレイみたいなあんな特異なところ...大きくなってきたらあれだけ大きくなってきますけれども、普通は本ですよ、出だしは。安値というのもあったけれど、そういうのがあったくらいで、特に組合員活動をしているような雰囲気でもないし、何もないから、「まあそうだね」で終わっちゃったという...

庄司：ICA-APの大学生協サブコミッティができてからは、岡安さんが議長をやっていたのですか、最初は？

岡安：そうです。1992年の生協委員会で「大学生協協議会」をつくろうと提起して承認されています。

(岡安追記；参考資料は、以下のページ

<https://okayasu.tokyo/kokusai.html>

https://okayasu.tokyo/_itnl/asia1994.html

に記録されています)

庄司：当時は、会長はこういうところにあまりコミットしていなかった？

岡安：そうですね、会長の年は親子の年の違いですから、ちょっと息子が一生懸命頑張っているのだからいいんじゃないというのが正直な気持ちだと思いますよ。

庄司：実際には岡安さんがやって、この頃からサブコミッティは、毎年原則やっていたのですか。

岡安：はい、やらないと、生協委員会が成立しないですから。

庄司：そういう感じだったんですか。

岡安：分かりやすく言えば。私も忌憚なく言うけれど、そういうことなのです。

庄司：いや、確か私が最初にシンガポールかな？かなんかでICAPの生協委員会に顔を出した時は、そういう感じではなかったですが。

岡安：それは2000年に入ってからですよ。入ってからは日生協の国際部もきちんと真面目にやるようになったからじゃないかな。その前までは日生協国際部が苦勞していたのですよ。だから、みんな私のところに逃げてくるわけ。だって、国際部からしたらオモリで疲れちゃうだろう。本人には言わないけれど、みんな来るんです。

庄司：そういう切り替えが起こったのは、2000年代に入ってから？ということは、岡安さんがやめちゃってからということになりますね。

岡安：2001年にソウルでICAの大会があって、その時までは私もここで少し首を突っ込んでいたから...

庄司：ソウル総会って、私も行っているんですよ。

岡安：ああ、そうですね、先生も。次の、日生協の生協委員会は、かなりアジアからいっぱい集まってはいたのですが、日本側のスタンスがきちんとしていなかった。はっきり言って半分くらいは、日本側のスタンスなのです。国際活動、何ていうのですかね。私から簡単に言わせると、「そりゃ集まらないだろうな」と。要するに、一緒に何かしようというシンパシーを全く感じない官僚主義だったようです、感想を聞くと。

庄司：なるほどね。

岡安：「日本が侵略してうちのじいさんばあさんを刺し殺した」という、周りにある中でも、こういう活動をやっていく時に日本の人間が威張っていたら、身もふたもないじゃないですか。だって、栗ちゃんも言ったかもしれないけれど、学生を連れていったら周りから石をぶつけられて、「なんだ」というので、そこにいた生協の、確かベス・アキノだと思うのだけれど、「違う、違う。この人たちは違う。同じ日本人だけどまったく違うの」と一生懸命言って、石が止まったのです。そういう時期なのです、まだ。活動もまったく入り込んでいなかった。ほとんどヨーロッパしか行っていなかった、日生協の幹部が。

庄司：アジアの方は...

岡安：国際活動の名のもとに、ヨーロッパに遊びに行っていたのかな。それはもう、私もずっと聞いていたのです。それと同じことは、一緒に行った時、デイトンに行った時だね、訪問者名簿に記帳したら、「この人たち、何しに来たんでしょうね」って言われたら、日生協幹部の名前があった。「そうねえ」って。そういうのはいっぱいありますよね。イタリアなんかでも、「イタリアに日本人が何しに来たんでしょうね」って。

庄司：日生協はでもその後、変わってきたと？

岡安：いや、それは日生協というの名のもとに単協のトップが行っているわけですから。単協のトップは本当にもう、ご苦労さんという...農協と同じですよ。

庄司：はあ、農協は今でもそうですよ。

岡安：今でもそういう傾向あるでしょ？

庄司：日生協はちょっと違うかな？

岡安：日生協が、国際活動を真面目に始めたら、そういうのは消えていくんですよ。多分、ここらんへんの結成前だなあ、95年位には、フィリピンの女性が、名前を忘れちゃったけれど。これは、中野にいる頃だからまだ95年前だね。「やる気茶屋」に来て、韓国経由で日本に来たら、韓国の人に「お前は騙されている、第二次世界大戦で日本人にやられたことを忘れているのか。日本人はニコニコするかもしれないけれど、騙されてるんだ」って。で、来た時に、その女性が我々を「信用していいんだよね、いいんだよね」って何回も泣いて念を押した場面に私もいました。そういうのの切り替えですよ。これは、栗ちゃんがよく知っていますよ。私もいたんだけど、あんまり英語わかんないからね。泣いているのだけは分かったけれど。そう言えば、こういうことも、日本の情勢、今もそうだけれど、2005年位に上海に行った時に、イアン・マクファーソンっていう方、ご存知ですよ。国連の専門家会議「協同組合と就業」に私が行った時に、日本の労働の劣化の話とか、委託関係、ちょうどキャノンとかああいうものが、栃木の方でも大騒ぎして、とんでもないことが起きている時期、そのことをきちんと話して、オープンにしたら、「こんな話初めて聞いた」と言われました。要するに、日本の生協関係者は自分たちの成功事例しか語っていなかったようです。生協が「成功」していても、日本社会が劣化しているのでは意味がないのに、それを言わない。「現実の日本は大変なのですよ」ということで、そういう話をしたら、「初めて聞いた」って。そんなものなんだろうな、と思いましたね。

庄司：岡安さんが大学生協連の専務になって、国際交流の道を具体的に開いていったのは、今の話で大体分かったのですけれども、専務時代のことをいろいろ聞き出すときりが無いと思うのですが、私が特にもう一つ聞いておきたいのは、岡安さんが大学生協連の専務を辞めた後、協同総研の方に力を注ぐようになった？ 協同総研理事と書いてあるのはそういう意味ですよ？

岡安：協同総研理事は、1999年から理事になって、今だからオフレコ、ずっと黙っていたんですけど、まあ、10年過ぎたからいいんですけどね。この時、この研究所の理事長の杉本さんと

いう方から理事長やってくれという話がきたんです。それはできないと。そうすると、理事ぐらいはできるってことになるじゃないですか。それで理事をやっていたのですがね。

庄司：なるほど。それで、そのワーカーズコープみたいな方向に道を開いていきますよね。つまり、大学生協が協同総研とか、ワーカーズコープとか、そういう方向に道を開いていったというか、そっちの方向にも貢献しているのだということをちょっと話してほしいんですね。

岡安：あんまり貢献していないんじゃないかね（笑）。貢献というふうに言われると、私は自分の関心事と合わせて...

庄司：いや、大学生協連が貢献しているという問題じゃなくて、岡安さん自身のことでいいのですけれど。

岡安：話をシンプルにしますと、ビジョンとアクションプランを作っている頃です。この20世紀答申とかビジョンとかいう議論をしている時ですね。

その頃に背景としては、いじめ問題とか、そういうものがずっとあった時期なのです。いじめ問題の解決をどうするか、というのがあって、これを日本生協連、私の先輩がいたわけだし、「こういういじめ問題なんていうのは生協の力では解決できないのかね、組合員がいっぱいいるわけだし。組合員同士で、組合員の子ども同士でいじめをやっていることも多いんじゃないの？」と新鮮な気持ちで聞いたとき、「そういう組合員同士でもめるようなことを語ると生協の結集は弱まるからやらないんだ」と言われ驚きました。「俺が言ったわけじゃないよ、あの人が行っているんだから」と、結構古い都民生協の幹部女性の名前が出た。こういう生協では私は自分の人生を賭ける気はしないなと思ったんです。やっぱり、世の中の一番みんなが真剣に考えてどうしようもない、どうしようかと思っていることに対応できるのが本来の協同組合であって、それを避けて事業を安定化させようなんていう考えはさすがに止めてほしい、ということで、それはビジョンとアクションプランを作っている頃です。この頃に私は青年のHRD：Human Resource Developmentという提起をICA-A Pの生協委員会とかそういう場所でやっている。

(http://members2.jcom.home.ne.jp/okay_kisaburo/_files/youth-HRDP.html)

その頃に前後する形で、協同組合はどちらかというとフィリピンとか先程言った女の子も含めて、アジアでは多くの国で学生は比較的エリート集団だと。「エリート集団が自分のエゴの関心事じゃなくて、周りの地域の貧困地帯とかそういうところがフィリピンではいっぱいあるだろう。そういうところに関心を持ってどうしようかということをおもわないで卒業していいところに就職したら、この国は変わらないぞ」と。そしたら、真面目に、日本よりは反応が早い。真面目にやって、貧困地帯にコープを作ろうと決めて。本当にできるのか。できないのですが、実際は。だけど、トライするわけですよね。

コープっていうのはもう一つ、障害者などとの関係もあるのです。フィリピンでは社会保障がしっかりしてないから、障害者が出たらその家族の生活がだめになるくらいで、障害者が仕事をして収入を得るようなしくみをつくらなければならない。それで、協同組合を作って、収入を得る仕組みを持ってやっているのですよね。BBMCですが私も何回か行っています。

そんなことをやって、いろんなことを地域の関係を組み立てるといって一生懸命やるようなこと

を、それが大学生協の役割の一つなんじゃないかと。要するに、事業をどうするかというレベルじゃなくて、「『協同』という組織を使えば社会の中のいろんな矛盾について変えることができるんじゃないか」というふうに関心を持つような学生が増えれば、これは冥利じゃないですか。これは、大学の教員でも高校の教員でもそうはできないですよ。これは生協で実際に仕事をしている、そこで収入を得ている人間だからこそやれる分野ですよ。で、意外とそう言うのに学生は乗るんですよ、みんな。そう言う部分が。何人かですよ。何人かでいいんです。乗るのは。100人に話して100人が全部乗ったら、もっと世の中変わっているはずですけど。100人に話したら、2、3人乗ればいいですよ。確かに硬派のメンバーですから。まあ、そんな活動をもう一方では、その時に、肝心の日本の中で一番の関心事なんかについて、「そんなことしたら、組合員同士で喧嘩になったら、事業伸びないからいやだよ」なんて、ちょっとこれは違うなと。ということ。

生協は社会の上澄み層を組織すると。生協以外、協同組合というのは本来、収入を得るために事業を興すために作るのだけれども、生協だけは協同組合の中では特殊で、協同組合外から収入を得て家計を持っている人が節約のために使う協同組合だから、一定の収入のある層しか組合員に入っていない。

まあ、そんなことで生協の中でも大学生協はきっともっと上澄みかもしれないと。受験戦争で結構踏ん張ってきて、頑張ってきた人間が来た組織なのだから。自分のことは棚に上げて。まあ、一応そう言うことに。組織上の構造としては。同時にそういう人たちだからこそ、いろんなことに関心を向けなくてははいけない。東大生協の時も総代会で言っていたんですけど、学生に向かってね。「民主主義的な感覚が抜けている東大生なんていうのは、社会の害だからね」と言ったこともある。

その時には、組織自身が関心を持っていなければだめですよ。いじめの問題なんていうのは、例えば生協理事会が関心を持てば、みんなも「そうかな」と思うけれど、生協理事会がまったく関心を持たないで「組合員が二分するから嫌だよ」なんて言った時に、組合員活動ってそういうのがなかなか出てくるわけがない。その時にどうするかというのがあったので、だったら思い切って上澄みじゃない地に着いた部分をやってみようかということで、日生協の仕事の話もいろいろあったけれど、今に至る訳です。「日生協に行って、日生協変えてくれ」なんて声もありましたけれど、私はそんなに自分の力に傲慢ではない。「変えたいならがあなたが行け、私は嫌だよ」、「これを変えるエネルギーを私は使う気はしない」と。それだったら自分も少ないエネルギーを効果的に楽しく使いたいわけですからね。

だったら、というので変わった。そういう意識を持っていたのは95年くらいより前なのですね。あまり言わなかったけれど。その頃はICAの生協委員会とかそういうところに向けた文章は、そういう傾向の文章が多いんですよ。

庄司：なるほど。それで、協同総研に...

岡安：協同総研自体は偶然です。前の理事長、その頃やっていた協同総研の理事長が、田中ひさしさんの前の大学生協連の専務だったんですよ。今、亡くなられたけれど、杉本さんか。杉本さんがここに来て。「協同総研の理事長なんかどうかね」ってきたから。その時、彼が言ったのは、私が大学生協連でずっと専務とか副会長とか、こっちで給料をずっと定年までもらうものだという前提

で話を持ってきたのです（だと思えます）。私はそろそろ大学生協を辞めようと思っていた時ですから、「無償の理事長は無理だ」と言いました。で、理事だけはやるから。なんだかんだとあって、協同総研に行って、やることになった。そうしたら、昔、協同集会があった時、「庄司先生も付き合ってもらったことがあるんですよ」って言われ、資料を見たら、そうなんですよ。

庄司：協同総研の最初のシンポジウムね、そうですね。ただね、あの時は私もよく分からなかったんですよ、何でこういうのができるのか。で、実際にこれを中心に高齢者生協もそうだけれど、そういうのを中心にやってきて、どうですか。この大学生協連を辞めた後の岡安さんの仕事の中身と意味なのですか。

岡安：中身と意味。まあ、自分なりに面白いところもあるし、イライラするところもあるし、いわゆるマネジメントが全然できていないと思ってイライラする場面もあります。その分だけ、自由に自分の地域に入っていけるとか思っていたり。今は、多分大学生協にいたままだったらまったくやらなかったであろう、協同組合全般のことについて発言力を増しているのですね、私は。これは、大学生協とか多分日生協にいただけでは味わえなかっただろうと思います。それは、別に労協、労働者協同組合だけではなくて、大学生協をやっていたこともベースにあるのです。みんなの評価はそうだけれど。従って、日本協同組合学会の常務理事、副会長とか、協同総研で先鞭をつけたと思っています。そういうふうにして。その前に、ILOの協同組合勧告（2002年）なども、私が総研の専務理事をしていたとき協同総研が事務局として準備するわけですよ。

今、日生協関係にはないのですが、農協関係雑誌に、論文を書かせてもらって。多分、庄司先生はテーマを決めたら書きたくて仕様が...こういうテーマを与えてくれるんですよ、書いてくれませんか。これは一番新しい今度載るのですけれど、こういうのに。これは、ほとんど私の経歴からすれば「天睡の論文」ですけれど。

庄司：後で読ませてもらいます。

岡安：一方で、友達関係が大きく変わった。大学生協連の専務でいた頃っていうのは、友達やいろいろな関係っていうのは、やはりその範囲なんです。それを降りると、見事にいろんな友達ができるんですよ。労協人は当たり前、他の協同組合、他の運動団体、地域、これは、普通は定年になってから、60歳を過ぎてから体感することを、52歳で体感できたんだと思います、まだ体力がある頃に。これはまあ、いろいろあったとしても、よかったかもしれないと私も思っています。それがこういういろんな広がりとか研究者としての広がりとか、自分が本来言いたかったことなんかをきちんとほかの雑誌も書いてくれないかと来たりしているような、ほとんどこういう時の勉強が蓄積したのは、90年代のビジョンとアクションプランを作る前後辺りからなんですよ。あの頃からそういうのを勉強しながら実践をするという...

庄司：その時に、先程仰ったような、いじめの問題が深刻になっていて、それを解決できないような（したくないような）生協、そういう視点が一つと、90年代を通じて高齢化というか、高齢者の介護というのが非常に深刻になっていって、介護保険ができていくわけですよ。そういう動きと協同総研の仕事、あるいは高齢者生協の仕事、ワーカーズコープの仕事っていうのは、何か関係があった？

岡安：大学生協にいる頃は、高齢化のことについては頭の中で理解するだけであって、実感はなかったですね。本当は実感を込めなくてはいけないのですが、年金問題とかそういったものも含めて福武先生から何回も何回も「問題なのだから、大変なのだから」と言われることは頭にあります。労働組合とかそういう人たちは反発するけれども、会長がやっているのだから会長の話は聞こうって、会長の話を聞いたら、あれだけ説得力持たれると、「そうかなあ」って。

でも、自分自身の中で高齢社会が来るからどうのこうのっていうのは、そこ自身はあんまりなかったです。どちらかというと、協同組合、一般の関心事と、意外とワーカーズコープというものを正面からはあまり知らなかったのですが、生協運動などに置ける専従者の役割、というより労働者の役割はどうなのかという問題にはすごく関心を持っていました。

一般的に生協経営の場合には、専従...パート職員の動員とかの用語を使う。いいような悪いような、個人的にはあんまり動員って言葉はよくないんじゃないかと感じます。で、ビジョンとアクションプラン策定の際に見つけた用語が、「ステークホルダー、だったのです。「この用語で経営の見方をもう一度整理することができる」と。これがビジョンとアクションプランに生かされていたはず。

大学生協は、特に東大生協は専従者支配だと言われていたのです、70年代なんかは。専従者支配だと言われながら、一方で大学等からは一ランク下の組織として見られていた、小売業ですから、生産じゃないんですから。まだあの頃は生産有利ですからね。そういういろんなことがある中で、そこで働いている人間が、左翼運動を通じてでなければ自分の人生の実現実感がわからないような労働は違うんじゃないかと思ったんです。

労働そのものがきちんと評価されるような世界を、生協の中で作らなければならない。そのためにはどうも、一般の生協職員は専従者支配の中心にいるわけじゃない、専従者支配の中心にいるのは専務とか一部の人間だけだよ。ほかの人間は、全体の運動を善意に思っているんなことをしているという、どちらかというと、善意の集団だよ。いうところから、それは労働組合がやっているというところもあるのですが、というところで働くということについて、協同組合で働くということは何か。

だけど、極端なのは、協同組合の中に労働組合はいらないっていう人、幹部たちもいたんです、私が東大生協に入った頃、70年初めの頃は。「結社の自由があるのだから、自分たちが作りたい労働組合は認めなきゃ、まずいんじゃないの？」で、どちらかと言うと、そのくらいの発想でいたおかげで、労働組合に入っちゃった限りは自分も労働組合の役員をやらなくちゃいけないことになりました。役員をやると、自分が今まで知らない世界がわかる。で、協同組合では単純に会社で働くという、会社で働いたことがないから分からないけれど、会社で働くのとは違う働き方、そこに意味を、働くということ自体に意味を見出す、運動に意味を見出すだけではなく、働くことに意味を見出すということ、これは大切じゃないかと思うんだけど、現実とはまったく違うことが労働組合の活動で分かってきました。

運動には意味を見出すけれども、働いている人間は店長とかそのくらい上にはいかないと、例えば東大生協だと、組織の路線とか方針というものはほとんど分からないんです、現実。これがその後、組織部会とかに全部つながっていくんですがね、要するに自分が生協の事業とか生協の方針とかに自分が関与していると思えるのは、せいぜい店長とかの幹部になってからなんですよ。それ

はまずい、ということを実はどういうふうに変えればいいのか。これが労働組合をやって感じたことです。

みんな善意の集団ですから、働いている人間は。組合員のためにいろんなことを専務が言ったら、7割くらいは聞きます。別に私だからじゃない。大学生協は、専務が言っていることなら、7割くらいはまず聞こうという気から始まる組織の集団なのです。しかし、そのことは、専務になってくると分からなくなってくる。自分の力でそう説得しているのではないか、と自分の力を「過信」「誤解」する。でもそれは違うのだと。もともとそういう善意の集団のグループなんだと。だって、会社だって社長が言ったら「そうかな」と思う社員は半数以上いるんですからね。生協だって当然いて不思議じゃない、そこの位置をどういうふうに見ていくかというのがあったので、ワーカーズコープというのは、自分の中では違和感のない組織でしたね。

庄司：大学生協をやって、高齢者生協とかワーカーズコープとか、そういう方向に行った人のことを知りたいのですが。

岡安：ああ、1人か2人いますね。

庄司：今、どのくらいの年齢の人ですか？

岡安：もう、いい年齢になっちゃいましたね。1人は立命だけ、院生をやっていたんだだけ？

庄司：もう1人は？

岡安：もう1人は、どこに行っちゃったかな？

庄司：ちょうど、岡安さんが大学生協連の専務を辞めて、協同総合研究所とかワーカーズコープとかやり始めたころに、もっと若い人で、大学生協からそういう方向に行った人っていませんか。

岡安：大学生協で働いていた人？

庄司：大学生協で働いて、という必要はないのだけれど、大学で生協やって、というのでもいいのですけれど。

岡安：学生時代、生協をやった人間はいますよ。大阪事業連合にいて、辞めてこちらに来たの、何と言ったっけ、1人...

庄司：先程、いじめのことをまともに考えられないような生協じゃ、という話がありましたよね、そうすると、反対に、一方で高齢者が増えてきて、生協はそっちの方をやらないとだめなんじゃないかと思って、そっちの方に行った人っていうか、来た人っていうか。

岡安：まあ、それはいくつかありますけれども、高齢者の生協はある意味きついですよ。高齢者、特に理事になるようなメンバーというのは、社会的に自分の成功事例を持ってるような人。人生の成功者ですからね、人の言うことなんかそう簡単には聞きやしないですよ。もう、普通の会社の経営論をバンバン展開しますからね。

でも、そういう人たちが十数年経つと、今、70いくつで、体力なくなってきましたからね。ちょうど入れ替わる時期です、今ね。やっぱり、高齢者生協といえど、中心で働ける人間は50代です、体力的精神的には。

庄司：まあ、そうですね。

岡安：で、まあ、女性がやってくれるのなら、それに越したことはない。高齢者の方は、比較的大内先生なんか、田中学先生もやってもらっていきますけれども。

庄司：女性では、かなり積極的にやっている人は...

岡安：女性は普通に仕事の関係でやりますから。自分たちがケアワーカーとか、地域の仕事起こしているのは、単純にいうと、女性の方がうまいのですよ、ネットワークの使い方が。けっして、マネジメント能力じゃないですよ。はっきり言ってネットワーク... (笑)。新しい製品を作るとか、技術じゃないですから、今やっているのは。まさに、介護とか、ああいう世界ですから。一定の標準の世界がある中で入り込んでいるわけで、これは女性の方がうまいですね、やっぱり、明らかに。

庄司：ちょっと、そういう世界のことを、そういう世界に大学生協がどういつながりをもちうるかというか。

岡安：そうですね、例えば、学生の頃から大学の中のキャンパスの清掃とか、ボランティアでやらせるのではなくて、一定の金を払う形で組織させてクラブ、例えばスチューデント・ワーカーズコープみたいな形でやれば、やって仕事をするとかいうことも、本来はやれますけれど、現実はかなり難しいですよ。清掃の場面とか、そういうところは、様々な利害関係が錯綜する部分ですからね。よほど大学の方が腰据えてもらわないと。だけど、大学が腰さえ据えてもらえば、5年後くらいには変わるわけですよ、そういうのは。

学生の場合には、自分たちで仕事をアントレプレナーみたいな仕事というものをもっと大学自身、大学生協というよりも大学の方がやっていると思うのですよ、今ね。必死ですから、大学の方は。とりあえずは、全部成績にかかわりますからね。そうすると、アントレプレナーみたいな仕事をやったり、インターンシップみたいな仕事をやってみたり、いろんなことをやった時に、以前のビジョンとアクションプランでは、本当は大学生協自身がインターンシップの対象になるぐらいの仕事の評価になっていけばいいんだけど、そういう気持ちで一つひとつの仕事を見直してレベルアップしていくと、日常の感覚の中にそういうのを持っている必要がある。

庄司：大学生協にですか。

岡安：大学生協に、学生が。

大本：学生委員。

岡安：そのために学生委員をやっている人も昔はいっぱいいたけれど、それはなくなってきたね。

大本：そういうことは、結果的に大学生協に残る人はいますけれどね。

岡安：仕事の価値について言うと、協同組合は仕事の価値をきちんと学生の中に教える組織だと思うのですよね。収入が得られるかどうかということは、それはどこでもやっているわけで、そんなの別に大学生協がやらなくてもできる。ところが、仕事の価値なんてのは、大学だってなかなか教えてくれないわけです。これは教員が教えられるのか。専従が教えられるのかということだけは、きちんと考えてもらった方がいい。大学生協の価値を、教員は教えられますか？ 特に、生協、協同組合で働く価値を…。

庄司：そういう意味ではね。

岡安：ピアコンサルタントではないが、どちらが仲間に近いか。そこら辺は、多分、今はまだ、昔言うと、専従が意に叶う学生をこき使って運動ばかりやったっていうのは、70年代ですからね。「それじゃあ、まずいんじゃないの」って言ったのが福武先生ですからね。「それは違うと思うよ」って言った。「もっと全大学人の中にきちんと根ざしたら」と。今はどうなっているか、分からないですけど。

庄司：ちょっとね、今日の話の中で大体いろんなことを伺ったのですが、印象的だったことの一つは、いじめの問題をまともに取り組めないような生協という、あるいは生協の組合員というのは本物じゃないんじゃないかというようなことを、それと、高齢者が増えてきて、一応介護保険ができるんだけど、それに対する対応っていうのは、非常に不十分だったわけでしょう、今でも不十分ですよ。で、そういうことに目を付けて、高齢者生協とか、労働者生協とか、そういう方向に行った人っていうのはいないですか。

岡安：大学生協で働いている人間で、意識的にそういうふうにした人間というのはほとんどいないですね。

だって、ほとんどの人間からすれば、まったく知らない世界です。まったく知らない世界って、それは行く意志も生まれませんし。

金は少ないかもしれないかもしれないけど、やりがいだけ、やりがいしかないかもしれないけれど。そういう感じで。それとも一定の幹部にならないと、幹部になると多分40、50くらいでは大学生協とは変わらないし、幹部になるのは早いから、今の大学生協よりははっきり言っていいかもしれない。今は伸びていますから。幹部が必要だから。大学生協は事業が増えない割に、年取った人間がどんどん増えているじゃないですか。

庄司：だから、学生の頃に大学生協を経験して、それで協同組合的なことをやろうと思って、労働生協とか高齢者生協とかそっちの方に来る若者っていうのはどうですか。

岡安：学生時代から？ 結構いることはいるんですけどね。いっぱい来て、大学生協の活動をしているか、していないか…いることはいるのですよ、私も名前が出てこないだけで。学生時代やってたよ、三重の方で誰かやっていたよって聞くんですけど、本当なのか。松本薫みたいな人間

が、意外と生き延びるんですよ。柔道の、野獸的な（笑）。

庄司：そういう若者っていうのはいますか。

岡安：たまにいますね。本当にたまにしかいない。ワーカーズコープに来るくらいですから、たまにいますよ。だから、「ここは大きな組織だから就職します」なんてことは、まったくありませんからね（笑）。

原田：そうだね。志望動機にそんなことないからね。

岡安：自分で仕事を探す、見つけてこいからです。そういう組織ですから。突然、所長とかになってみたり、遠くの災害地に派遣されたり、市役所まわりをしたり、自分達で。セミナー作って事務局やって、その地域で仕事起こしができるかどうかと。

例えば災害地だと、生活物資を送ることは、最初のうちはいいんですよ。去年の2、3カ月の間は。今、必要なのは仕事ができること、収入が得られること。仕事を起こせるような、仕事ができるような、というのがあって、それをワーカーズコープを登米市、登米で仕事起こしやってみて、野菜の直売所みたいなのを作ろうか、ただ作るのじゃ面白くないから、長野の方できっとそういうことをきちんとやっているようなところの話聞きながらやるとか、いろんなことを模索しながら仕事をやっていく。

庄司：でも、そういう仕事起こしてみたいなものは、もう災害の前から必要だったわけでしょう？

岡安：もともと必要なのです。それぞれの協同組合が大きくなってくると、なってきたからそうになっているんだけど、協同組合と協同組合の間、そういうすき間にいっぱい仕事があるわけですよ。モンドラゴンが優れているのは、すき間にもう1回、ワーカーズコープで作らせるところですよ。これが、全然日本と違う、まったく優れたところ。異種協同組合間協同の希薄なのが日本の協同組合の一番の弱点ですよ。

庄司：そういうことをできないですかね

岡安：一番私がやりたかったのですよ。でも、組織はやはり囲い込みが基本の「パラダイム」がある。古いパターンですね。シタデル、城塞型です。本当は城塞型じゃないのにね。みんなのネットワークとしては、自分の支配下に入っているかどうかということに関心事を持つというのは、まだまだそんな幹部の方が美味しそう...運動もそういう傾向がある。

庄司：協同組合について発言できるようになった、とおっしゃいましたよね。だから、生協だけに限らずね。いろんな協同組合の間に入って、つまりモンドラゴンで行われているようなことをやるように仕向ける、というようなことはできないですか。

岡安：まあ、口で言えるくらいですね。残念ながらね。

庄司：だから、それを口で言うだけじゃない方向に持っていくようなきっかけを...

岡安：持っていきたいのですけれどね、まあ、そういう点での、力は個別々々はいっぱいあるんだけれども、協同組合って力の出し方をすれば、もっと変わった世界が地域に作られるようになるっていうのは、いろんな人が思いながらも、そういう人は、企業は小選挙区制ですからね、やっぱり。本来、企業っていうのは、外との接点とのところでいろんな事業を起こすけれども、やっぱり内部論理で幹部は作られていきますからね。出世。外から評価されて中で出世するなんて、聞いたことないものね。中で評価されないとやっぱり中で出世できない。残念ながらアメリカとは違う、幹部の作り方なので。アメリカなどで傑作なのは、作り方としては例えば副社長あたりだったら一定のレベルしかいないから、後は誰がなってもいいのを作って、誰がなってもいい。そこまで本当は作ればいけれど、日本はそんな器用なことにはできないですものね。

でも、どんな柱に変わっていくのですかね。徐々に変わっているなって実感はするんですよ。例えば、ワーカーズコープとか協同労働なんてのは、私が行った頃なんてのは、誰も鼻にも引っ掛けないような感じだったのが、今はそういう言葉を使うと、ハハハと頷いて笑ってますものね。たった10年ですよ。たったというか、10年も。でも、大きな歴史からすれば、たった10年ですよ、まだね。私からすれば。

庄司：たった10年...まあそうですね。

岡安：そんなに変わるものかなと思うくらい、変わってきていますよね。

庄司：もっと、若い人がそう言うところに入っていてもいいんだ。

岡安：この間、全然関係ないけれど、女性だけで女性の教員、駒沢大学の女性の教員が聞き役をして座談会やってた。「男は入らないようにした方がいいんじゃない」って言って。男もいたらしいんだけど、やっぱり働きやすい場所は。そういう点では、まあ、「働きやすい場所だな」と思いながら、みんな仕事をしているようですね。

まあ、ワーカーズコープは若いのが多いんです、とにかく。大学生協やっていた人間が来るかどうかは別にして、若いのがとにかく多い。

学童保育は、やっぱりそれは来た限りにおいては、学校ではできないような、もっと地域の組み立てとかを考える。地域の人と、誰からも、学校みたいにコントロールされないですから。何のコントロールもされないけれども、みんなから信頼されなければいけないといった、中で考えるわけですから。その点では、誰かが何かやってくれるから後でついていこう、という人間にはちょっときついですね。

庄司：いや、だから、大学生協で、先程おっしゃったように「協同」という仕事、「協同」あるいは「組合」という仕事でもいいですけど、そういうのを本当に教えられるのは、つまり生協の専従の職員？

岡安：仕事の場面ですよ。

庄司：いや、だから、そういうので学生を鍛えて、鍛えられた学生がそういうところに入っていく

ようにならないかどうかと。それは、そう簡単ではない？

岡安：大学生協にやっつくっついている人間は無理ですね。やっここにいるって、必死になっている人間は、まず発想として無理ですから、それは。「大学生協がこんなことをやっていていいのか」というくらいの感覚を持った人間なら動くかもしれないですね。それはわからないですよ。

庄司：そういう人間を作り出さなければいけない。

岡安：80年にレイドロー博士（故人）が「協同組合の一番の深刻な弱点は、経営者と労働者の関係が、一般企業とあまり変わらないところにある。これはきっと深刻な弱点なのだ」と。そのことを解決できたかということ、なかなか解決できない。そのことをずっとそういう意識があって、なんとかせっかく働いているのだからというのでやるし、労働組合なんかも追求するし、ビジョンとアクションプランというのは労働組合の会議に行って、労働組合の会議の中でビジョンとアクションプランを説明するわけです。とにかく、「現場で働いているこの人たちがその気にならない限り変わらないんだ」と確信があるわけです。こういう、まあ逆にその頃の人間が、今でも知っている関係です。

庄司：もう2時間半過ぎちゃったので、疲れちゃったと思いますけれど、今日の話を起こしてもらいますけれど、それをざっと見て、特に固有名詞や...

岡安：ええ、まあこれは外してもらわないと。悪い方に固有名詞はあまり使わなかったけれど。

庄司：いや、だから、そういう、これは勘違いだというところは直していただけますか。ちょっと一応記録として残して、今後の、今、国際交流中心にやっていますけれども、大学生協史の基礎にしたいと思っていますので。どうも長時間ありがとうございました。

(了)